

---

# 紫御殿の紳士

草餅あん子

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

紫御殿の紳士

### 【Nコード】

N2453B

### 【作者名】

草餅あん子

### 【あらすじ】

こうして少女は大人になっていくのです。

私が高校1年生だった頃の話。

夏休み前で学校が終業式だけで終わり、高校から駅へと歩いている途中で、鼻先に僅かな雨を感じた。

朝は晴れていたし、天気予報は終日晴れとのことだったので、傘は持っていなかった。

『通り雨が。すぐに止むだろうし、まあいいか。』  
と、電車に乗った。

40分間電車に揺られ、地元の駅に着き、改札を出ると、先程までの雨が強さを増し、バケツをひっくり返した風になっていた。

小走りで自転車置き場へ向かい、朝に自転車を止めた所に行くが、自転車がない。

自転車置き場中、どこを探してもない。

『鍵はかけといたけど、盗まれたのかもしれない・・・』

駅から家まで自転車だと20分、歩くとその倍近くかかる。

それにあの自転車は、私がバイトを始めて1ヶ月経った時に初めてのお給料で

買った、私にとって特別な思い入れがある自転車なのである。

『あの自転車をこんな時に盗まれるなんて・・・』と、悲しくなつたと同時にう

んざりしたが、『とにかく今は早く帰ろう』と思い直し、家に向かって急いだ。

5分程歩いただけで白いブラウスがびしょ濡れになって、下に着

ていたキヤミ

ソールが透けて見えていた。

道沿いにある植木屋に居た小汚い男が、にやにやしなからこちらを見て、

「ブラが見えない！残念！」

と言う。ものすごく腹が立ったが、一刻も早く帰りたいので、男を睨みつけなが

らスピードを速めて通り過ぎていった。

平家建ての家がある曲り角が見えてきた。

確かあの家は、中学3年生の時に同じクラスだった石井君の家であったと思う。

この家の庭には、道路に面して何本か紫陽花の木があり、時期になると青紫色

の立派な紫陽花がしとやかに咲き乱れる。

梅雨の重たい曇り空と、しとしと降る鬱陶しい雨を美しく変えてしまう家であ

り、地元では“紫陽花御殿”と呼ばれ、ちょっとした有名スポットであった。

今は少し時期外れだったが、今年の紫陽花達は大きな花を咲かせていて、突然の

雨をさも嬉しそうに浴びていた。

角を曲がると、紫陽花御殿の中に入ろうとする、壮年の男性と目が合った。

おそらく、石井君のお父さんであろう。

『あのおじさん、もう家についたのか。いいなあ。』

そんなことを思い、早足で通り過ぎようとした。

「君、ちょっと待って。」

男性の声で立ち止まる私。

「これ、使いなさい。」

と、男性が、自分が使っていた傘を差し出した。

私は、

「いえ、うちはすぐそこなんで結構です。ありがとうございます。」  
と断った。

「風邪をひいてしまうだろう、いいから使いなさい。」  
と言う男性。

私はその好意に甘えてお借りすることにした。

「気をつけて帰りなさい。」

男性は言う。

「ありがとうございます。」

私がそう言っていると、男性はニコリと微笑んで御殿の中へ入っていった。

男性が貸してくれた、黒くて大きな傘を開く。

傘の下に身を入れると、冷えきった身体とは裏腹に、心は暖まっていた。

そして、突然大雨が降ってきたことも、大切な自転車がなくなってしまったこと

も、知らない男に腹が立つことを言われたことも、すっかり忘れてしまった。

暖かい気持ちで家に着き、浴そうに入っている、昨夜の残り湯を湧かした。

風呂から上がった頃には、先程までの雨が嘘のように晴れ渡っていた。

『まったく、人騒がせな雨だなあ』

そんなことを思いながら、私はベランダへ出て、黒い傘を干した。

その後、警察署に、自転車が盗まれたことへの被害届を出しに行

った。

翌日、借りた傘を返しに紫陽花御殿へと向かった。行く途中のスーパーで、お礼に渡す菓子折りも買った。

御殿に着き、チャームを押すと、たまたま石井君が出てきた。石井君とは同じクラスだっただけで、喋ったこともなかった。少しどきどきしながら口を開いた。

「これ、昨日、この家の人に借りたから返しにきたの。“ありがとうございませ

た”って伝えといて。それからこれ、よかったら食べて。」

そう言い、傘と菓子折りを渡すと彼は笑顔で、

「ああ、これ、オヤジの傘か。わざわざありがとう。」

と言った。それから軽く、世間話を交わして帰っていった。

—\*—

それから幾日か経ったある日の夕方、バイトを終えた私がお腹を空かせて家へ帰

ると、母親が喪服を着て、化粧台の前で鏡とにらめっこをしていた。

「どうしたの？」

と聞くと、

「石井君の家のお父さんが昨日、亡くなったのよ。今からお通夜に行ってくるか

ら。」

と言つ母。

「ええっ?! あのおじさんが?!」  
私は驚いた。

石井君の母親と私の母親は仲が良いようで、時々お茶しに行ったり、一緒に日帰りの旅行なんかに行っていたようだ。そのよしみで通夜に行くのだろう。

「で、なんで?」

と問う私に、母親が、

「今朝の新聞を見てごらん。」  
と言う。

そして身支度を終えた母は、

「お母さん、行ってくるから。ご飯は冷蔵庫にあんたが好きな酢豚が入ってるか

ら、暖めて食べてちょうだい。」

と言い残し、足早に家を出ていった。

テーブルの上に無造作に置いてある朝の新聞を見つけて、ページを開いていくと、

“49歳の男性が刺され死亡、30歳の男逮捕” という見出しとともに、石井くん

のお父さんの名前や、事件の概要が載っている記事があった。

『駅のホームで、女の人にしつこくナンパしている男に注意したら、逆上したそ

の男に刺されちゃったなんて・・・』

私はショックを受け、記事を暗記する勢いで幾度となく読んだ。

読んでいるうちに、口の中が塩っぱくなって、胸が苦しくなってきた。

あの日、アンラッキーだった私を救ってくれた紳士の優しさを思い

出し、そして、刺されてしまった張本人や、石井君をはじめとする残された家族のことが不憫に思えて仕方がなかったのだ。自分がお腹をペコペコにさせていたことも、母親が好物の酢豚を作っておいてくれたこともどうでもよくなってしまった。

それから3日後の昼下がり、市役所から、“私の自転車が見つかった”という知らせが届いた。駅から2キロほど離れた所に、乗り捨ててあったそうだ。

自転車を保管してある場所に向かう途中、紫陽花御殿の前を通りかかった。『私の自転車は帰ってきて、あんなにいい人だった石井君のお父さんは帰ってこないんだ。』そう思うといたたまれなくなり、涙が出そうになってしまった。

数日前までは美しく咲いていた紫陽花達も、今ではすっかりしぼんでいた。御殿の主がいなくなったことを悲しむように・・・

お気に入りの自転車にしっかりと鍵をかけていても、盗まれてしまうことはあるし、どんなにいい人であっても、誰かに殺されてしまうことはある。

そんな世の中の不条理を身近で感じた、思春期の夏であった。



(後書き)

この話はノンフィクションです。

当時書いていた日記を元に制作した、はじめての小説です。

感想、お待ちしております。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2453b/>

---

紫御殿の紳士

2011年1月15日15時11分発行